

福島県立美術館開館 40 周年記念展
「福島のアール・ヌーヴォー」関連事業

記念鼎談「福島のアール・ヌーヴォー～これまでとこれから」



2024年5月25日(土) 14時～15時30分
福島県立美術館講堂にて開催

出演：齋藤勝正氏（日本画家、本展出品作家）
酒井昌之氏（洋画家、本展出品作家）
早川博明氏（当館元館長）

進行：増淵鏡子（当館副館長心得兼学芸課長）

増淵：皆様こんにちは。本日は福島県立美術館開館 40 周年記念展「福島の美術家たち 2024」記念鼎談にお越しいただきありがとうございます。

今日はとてもお天気が良くて、山登りに行かれた方がいいなんて方もいらっしゃるかもしれませんが、美術館に来ていただいてありがとうございます。私今日、進行を務めます副館長心得の増淵と申します。よろしく申し上げます。

では本日 3 人の方に来ていただきまして、トークをお願いしております。簡単にご紹介いたします。

いちばん右の端が、齋藤勝正さんです。出品作家でいらっしゃいますが、中央大学法学部ご出身で、長年県職員として勤められまして、1976 年には文化課に配属され、県立美術館、図書館、博物館の建設に携わられました。画家としては、田淵俊夫氏等に師事されて院展のご出品を続けられています。県内日本画の中心的な役割を担われ、県展の運営にもご尽力されています。

真ん中が、酒井昌之さん。福島大学教育学部ご出身。長年美術教師として公立の中学校、高等学校、福島学院大で教鞭を執られました。山川忠義氏に師事され、同じ一水会に出品されています。福島県美術協会の会長をされまして、県内洋画の中心的役割を担われています。県展の運営委員会の中心でいらっしゃいます。

それから左側、早川博明さん。東京藝術大学出身、1980 年から福島県庁に学芸員として勤められまして、1984 年の県立美術館の建設、それからコレクションの形成など、立ち上げを担われました。その後もずっと美術館で勤められ、学芸課長などをされ、一時期郡山市立美術館の館長をされましたが、2012 年から 2020 年まで福島県立美術館第五代館長を務められました。今回ご出品の作家さんたちとも長いお付き合いをされておられます。

というようなお三方に今日はお話を伺います。よろしく願いいたします。すみません、座って失礼します。

まずですね、昨日お三方には展覧会、今回の展示をご覧いただいたんですけども、どうだったでしょうか、展示についてのご感想などを一言ずつお願いできればと思います。まず酒井先生、よろしいですか。

酒井：皆さん、こんにちは。私は洋画の方をやっております酒井と申します。今回の展示、前回から見ますと 33 年間空いていたもんですから、その間のことがいろいろ思い出されて、展示されている作品の中には、もう直前に亡くなられた方から、しばらく前に亡くなられてる方とか、いろんなことを思い出しながら見させていただきました。

大変、今回の美術館で選んでくれた作品は、その作家にとっては大変力が入っている良い作品が揃ったなど、何か会場全体を見まして、最後まで行ったところでこちらの方が疲れてしまうというか、大変、作品から受けるエネルギーはものすごいんだなというのを改めて感じたところでもあります。

増淵：ありがとうございます。では齋藤さんもひと言申し上げます。

齋藤：齋藤と申します。日本画を描いて、若い頃は東京の銀座とかいろんな画廊で企画展とか、あるいは個展などをやっていたんですけど、ある時に東京セントラル美術館が私の個展をやってくださるといふ、壁面 80 メーターくらいあるんですけど、それをやってくださるといふお話が来

まして、それをやろうってことで2年くらい期間があったんですけど、ちょっと体調を壊してしまいましたね。全身帯状疱疹ができちゃって、「これはちょっと危険信号で無理ですよ」ってお医者さんに言われて、断念したんですね。で、それを機会に銀座の村越画廊さんというところから「院展に出したらどう」ということでお話しがあって、院展に出すようになったんですけど、院展はですから50歳を超えてからなんですね。福島民報社の新聞で当時「齋藤さん遅いデビュー」って記事が出てたんですけど、遅いデビューって言われると確かにそうなんですけど、でも、お陰様で25年という短い期間で特待にあがることができました。東京藝大を出た方でも平均的に40年ぐらいかかっているんで、まあ自分としてはよくできた方かなと思っております。

ちょっと余計なことをお話ししてしまいましたけど、会場を見て酒井先生と同様に、すごく同じような感想を抱きました。33年間のブランクがあって、物故作家も非常に多くてですね、本人がご覧いただければすごく喜んでくれたんだろうになと思ったんですけど。また、当初計画にあった作家でも、今回ご本人が亡くなっていることで、なかなか作品を集めたり或いはお貸りできなかったということがあったと思うんですね。そういう訳で、ご協力いただけなかった方もあったので、ちょっと残念なところがあるんですが、でも私以外は素晴らしい作品が揃っていますので、皆さんぜひ会場に足を運んでいただけたら有り難いと思っています。ありがとうございます。

増淵：ありがとうございます。では早川さん、お願いいたします。

早川：皆さんこんにちは。元館長の早川です。今回皆さんご承知のように美術館開館40周年というひとつの節目を迎えましたので、何か40年のこれまでの来し方を振り返って記念になるものを作るのかなと、私はもう退任したので外からずっと眺めていたところですけども、今回は「福島の美術家たち」という、私にとっても非常に懐かしい形式の展覧会、40年前の開館直後にこの「福島の美術家たち」という企画をですね。第1回は私が企画担当したんですけども、それ以来の長い時間が過ぎて、また復活したということの新鮮な喜びといえますか驚きと同時に、それから展覧会の中身については、今、両先生方のお話ししたことと同じなんですけれども、私、美術館側の立場を長くやっていたので、そういう視点から見ると、洋画、それから工芸、2つのジャンルが今回は主流なんですけども、いろいろな、特に工芸などのメディアだったり、それから彫刻と3分野がありますけれども、この美術館、1,800平米の企画展示室で4部屋がありますけれども、全国の美術館の中でも結構広いスペースなんですね。そうは言っても今回見てみると、びっしりというか、たくさん作品が150点ほどですか、並んでいて、これをどういうふうに作品一つ一つが生きてくるように展示できているのか。そういう目を見た時に、昔私が担当した当時の展示に比べて格段に質が上がっていると。これは後輩連中にお世辞を言っているわけじゃないんですけども、実際に素晴らしい展示になっているなという風に思ったのが第一印象です。

で、それはなぜかということ考えた時に、私たちの故郷の福島県の各地域の中で、日夜、創作の喜びと、それから苦しみというものを通して素晴らしい作品を目指して頑張っていらっしゃる、そういう美術家の人たちが素晴らしい作品を作っているんだなということが、そこはまず

第一にあったればこそ、こういう素晴らしい展示空間が生まれているんだな、そんなふうに思いました。なかなかいろんな分野を同じ空間の中に置いてということは難しいんですけども、その難しい課題を上手に乗り越えて展示映えする構成になっている、そんなふうな印象を受けました。

この美術館も海外の作家作品とか、いろんなものを展示していますけれども、私たちのこの福島の出身の美術家の作品というものも、やはり何か心に訴えてくるものが非常にあるわけで、皆さんもぜひゆっくりとご鑑賞いただきたい、そんな風に思った次第です。以上です。

増淵：ありがとうございます。今回の展覧会は、私を含めて4人の学芸員が担当いたしました。私が日本画を中心に考えまして、洋画は坂本という学芸員が、それから立体は宮武、それから工芸は白木、というような4人で考えつつ、館内で話し合いを重ねまして、40名の作家さん、そしてお一人3点から5点くらいの作品を選ばせていただきました。本当にこの作家さんでよかったのかとか、それからこういう展示の方法でよかったのかとか、本当にどきどきしながら今日の初日を迎えたわけです。今、先生方のお話をいただいて、及第点をいただいたのかなと思っちょっとなんとおぼろげにしております。ありがとうございます。

ではですね、せっかくですので、酒井先生と齋藤先生の作品をちょっとご紹介をしようかなと思います。まず酒井先生の《雪の摺上川》、茂庭の風景ですね、これについて。このあいだ実は私、茂庭ダムに散歩に行ってきたんですけども、茂庭ダムを歩いていましたら、あれ、この風景？と思って写真を撮って、これはもしかしたらと思って酒井先生に伺ったら、茂庭ダムの周辺の風景だということを知ったんですけども、その時の話とか伺っていいですか？

酒井：はい。この作品は私にとっては思い出の、古い作品の1点なんです。雪の景色を大変、いいものだなと教えてくれたのは、大学で習った山川忠義さん、加藤五郎さん、それから渡辺良雄さん、そういう方々がこの茂庭というところを通して作品を発表してました。ちょうど私が学生時代でした。こういう絵を描いてみたいという憧れがありました。

そんな関係で、大学で助手になった時に山川先生が、神社なんかばかり描いてないで、たまには奥行きのある絵を描いたらどうだということで、ぜひ一回茂庭に来いということで、茂庭に連れて行かれました。当時まだダムがありませんでした。ちょうどここでいえば右



酒井昌之氏

上の方の森みたいところが、山川忠義さんが日展で特選を取った栗林のある場所なんですよね。そこで冬の間こもって描いてらっしゃったんですが、その場所がちょうど右上になります。大体、老樹の栗の林がそこにずっとあったものですから、そこに行って雪のスタートを切りました。だんだん習っていくうちに、先生がやっている仕事と同じ内容では何か真似てるようなので、樹木をあんまり描かないで絵ができないかなという気持ちが起きて、だから私は広いところを描いてみたいっていう方に進んできたわけなんです。

その後になって、この茂庭地区にダムができるということになって、10年くらいは工事の車両以外は入れなくなってしまうんですね。ちょうど茂庭で勉強していた場所が、この手前にある森のあたりで雪の景色を描いていたんですが、それがダムが出来上がってみたら全く行ってみると風景が一変してました。

自然というのは比較的曲線が多く組み合わせられているものが多い風景なんですね。あんまり直線というものが自然の中では存在しにくいんだと思いますが、曲線の連なりで自然が大体できているような感じだと思います。そこに新しくダムができて、新しい橋がかかったりして、何か景色が全く違うふうにしたものですから、自然の曲線と人工物の直線を組み合わせたらちょっと違う絵ができるんじゃないかという意味で、スタートしました。

ふつう風景画の時には空というものをある程度画面を抜くために使っているわけですが、その空を今回は要らないんじゃないかと。水がその役割をしてくれないかなというので、空を取ってしまって、水がそういう抜くための流れになってくれればなと思って作ってみた作品です。ですからいわば、人工物の直線と自然の組み合わせが、挑戦としては心の中にありました。そんなふうにして描かれた作品です。現在はもう学校も茂庭の中学校なんか全て当時行ってお世話になっていた集落なんですが、思い出しながら通いまして、何とか仕上がった作品です。そんな感じです。

増淵：ありがとうございます。山川忠義さんというのは本当に当館にも20何点かの収蔵がございまして、私がこの美術館に入った次の年くらいに特集展示でそれを全部展示する機会がございまして、入ったばかりだったので私すごくそれが印象深く、茂庭と言えばやっぱり山川忠義さんの雪景色というような。山川さん、それから渡辺良雄さんといった一水会系の非常に着実な具象の系譜を引かれているのが酒井先生というふうに見ておまして、なおかつこの絵なんか俯瞰でダイナミックに風景を捉えているところがあって、酒井先生ならではのだなあというところで選ばせていただきました。ありがとうございます。

では続きまして、齋藤勝正さんお願いします。

齋藤：はい。これは2012年だったと思うんですけど、再興第97回院展で出品して奨励賞をいただいた絵ですね。本来はこの前の年、96回展にも奨励賞をいただいて、こちらの96回展の絵の方が私は良かったんですが、美術館さんもそちらを展示したいってお話だったんですけど、2018年に県文化センターで大規模な個展を福島民報さんと福島テレビさんの主催でやっていただいたんですが、その時どうしても欲しいという方がお見えになって、譲ってしまったものですから残念ながらこちらの作品になったんですが、この絵はいわきの神白海岸ってところなんです。あそこの海は波が荒くて、灯台があるところなんです。そこで打ち上げられて座礁してしまった、そういった船



齋藤勝正氏

が何隻もあったんですね。この船はだんだんとやがては朽ちて跡形もなくなってしまうんですが、その瞬間瞬間に見せる美しさというか、自然が作った芸術作品のような感じで、すごい美しい色で、その瞬間の美しさっていうのを絵にとどめておきたいなという感じで、自然の一つのサイクルの中の、そういった大きなものを意識して描いた絵なんですけれども、幸い再興院展で奨励賞をいただきまして、全国に巡回していただきましたので、地名を入れることで少しでも震災後の福島県をアピールしたいなと、風評払拭にも役立てばいいかなという、そういう思いで描いています。

増淵：ありがとうございます。齋藤さんの作品は本当に細部まで繊細な描写がなされていて、すごく美しい日本画っていう印象がずっとありまして、そうした中でこの 2012 年の震災の後に描かれた絵っていうのは、本当に私にとっては衝撃的で。骨のような廃船が描いてあったり、黒い鳥が描かれていたり。それ自体は津波とかそういうものとは関係ない、元々あった船なんだそうなんです。ダイレクトに震災を描くのではなく、象徴的に、効果的に日本画に仕立ててくださって、全国の方に紹介していただいたんだなあとすごく伝わる作品だと思います。すみません、私ばかり感想を言って申し訳ありません。

そうしましたらですね、いろいろと震災も含めて、前の展覧会との間が 30 年、美術館のオープンから 40 年経つんですけども、ちょっと昔の話をこのあたりで。

本展は 40 周年記念展ということもあり、今回お出でいただいた早川さん。オープンメンバーというか、いちばん始めから美術館に関わってらっしゃった早川さん。それから齋藤勝正さんも、県職員として立ち上げに奔走されたということで、美術館の草創期についてお二人からお話をいただけますでしょうか。まず齋藤さんからお願いいたします。

齋藤：美術館ができたのは今から 40 年前になるんですけど、美術館のできる元々の動きというか、きっかけっていうのは 48 年前に遡るのではないかなと思うんですね。昭和 51 年なんですけど、松平知事が誕生しまして、その年ですね。松平知事が誕生したのは 9 月なんですけど、11 月に県の教育委員会の文化課というところで芸術文化懇談会ってのを開催したんですね。その企画担当したのが私だったんですが、その時に県内の有識者とか県組織の芸術文化団体の長など、たくさんの方に集まっていただいて、いろんな意見を出していただいたんですね。

先ほどお名前が出た山川忠義さん、県の美術協会の会長であるとか、日本画協会長の飯塚栖圃さんとか、在京美術家協会会長で当時日本水彩連盟の会長だった春日部たすくさん、会津出身の方なんですけど、この方とかですね、あと在野だとかこちらでも展覧会をされた橋本章さん、そしていわきの若松光一郎先生とか、郡山の鎌田正蔵先生なんかも出ておられたような感じがするんですね。あと白河の福田利秋先生とか、福島民報の元 OB で評論家をされた県美連の会長もされた渡辺到源さんとか、民友新聞社の高橋良一郎さん、福島民報の OB の佐藤民宝さん、あと太田緑子さん（県教育委員長）、宗像紀子さん（県商工会女性部会長）、思い出せばいろんな方がおられるんですけど、そういった方が出の中で、松平県政の柱には文化を据えるべき、文化というのを大きな重要な政策にしましょうというようなお話が出たんですね。

それで文化懇談会の提言として、松平知事に文化を重要な政策にあげてくださいという提言をしたんですね。その後に「文化を考える県民会議」というのができて、53 年に知事に進言して、

54年の年頭記者会見で知事が「今年を文化元年とする」という発表をされた。そこから美術館がスタートするわけですよ。54年の4月に文化課の中に施設班ができた、後の文化施設整備室なんですけど、その1年後に早川さんが、美術館・博物館を含めて最初の学芸員として採用されてきた方ですね。早川さんは終始一貫、建設の段階から最後の美術館長までずっとやられた方で、そういう人は一人きりいないもんですから、すごい功績者なんですけど、あまり持ち上げないでとさっき言われたんですけど、そういう意味では福島県の美術館にはなくてはならない存在でね、ずっとやってこられました。惜しくも退任されたんですけども、本当にこれからもご協力をお願いしたいと思います。

私はちょっと別なことも関わったので、お話ししたいと思います。財務規則の中で物品分類表の中に「美術品」という項目が無くて、職員提案でこれをつくってくださいといって私が提案して改正されました。あと、文化施設整備室を含めた課内全体の予算要求の取りまとめであるとか、職員の福利厚生とか、途中から総務担当となってしまったもんですからそちらも担当しました。

あと個人的には、横山操ってご存じでしょうか。「戦後画壇の風雲児」と言われた方なんですけど、54歳で亡くなった、多摩美大で教授もされた人なんです。その方のお弟子さんには県内には小泉智英さんとか梶田隆一さんとかがいる、私と同じ年代なんです。お二人は横山操にすごく心酔していた、すごい先生に可愛がってもらっていたと思うんですが、小泉さんが「横山先生のお宅にお墓参りに行きたいんだけど齋藤さん行く？」っていうから私も一緒に三鷹の深大寺まで行ったんですね。帰りに横山先生の奥様のところに寄って、建設準備段階なので私の方から厚かましいんですけど、「福島県の美術館に作品を寄贈いただけませんか」というお話ししたんですが、すぐご返事もらえなかったんですけど、残業してる折りに私時々電話を入れていました。そしたら時に「齋藤さんいらっしゃい」とのお返事だったので、準備室の方にそういうお話をして、「これはあげるってことだと思ってるんで、行きましょう」と。しばらく時間かかったんですが、当時の収集委員会の嘉門安雄さんってブリヂストン美術館の館長された方ですね、その方が「すぐ行ってこい」と言ったらいいんですね。それで当時の山崎室長と岡部学芸員と、お連れしてっていうのは失礼なんで私が随行してっていうんですかね、ご案内して、作品を寄贈していただくことができました。《建設》と《闇迫る》って大きな作品なんですけど。常設展で時々出ますので、ご覧になっていただければと思うんですけど。横山操って小さな作品でも当時は何千万とか、モノによって1億とかいう作品なので、すごい金額だと思っただけなんです。福島県に私もすごい貢献したと思うんですけど、特別功労で1号棒アップとか給料全然上がらなかったんですけど…ちょっと冗談です。

早川さん、毎日遅くまで残ってられて、時間外手当が全く出ない職場。ただ働きでずっとやってました。毎日夜12時、土曜日曜もなく。私も同じでした。文化課は新しい課なので、人手不足なんです。本当大変でしたけど、今ならぶっ倒れますし、大きな社会問題ですよ、180時間の時間外勤務ですから。今はできないですけど、それが今となっては楽しい思い出になっております。

早川：いま齋藤先生から変に持ち上げられちゃって恐縮してますけども。美術館が建設の段階で準

備室の発足の時から関わらせていただいて、その周辺についてちょっと触れてほしいという話なものですからお話しします。昭和55年4月から、私は大学の研究室にいたんですけども縁があって福島県に参りました。美術館の建設準備室、当時は文化施設整備室という名前だったんですけど、役所のように何のことかよく分からないと外部の人からは言われたけど。そこで美術館、それから隣の図書館、そして若松の博物館、この文化施設3施設を作りましょうという県の政策ですね、これは松平県政の超目玉政策であって、県庁の仕事の中でもその当時はちょっと特異な目で県庁内部、そして外部からも見られていたというふうに記憶しております。



早川博明氏

一応、美術館を建設するという流れはあったわけですが、じゃあいったい美術館というのはなんなんだ、美術館というのはどういうものなんだということについて、誰一人知らない。もちろん県庁の中のことです。美術館を運営して美術館を経験している人たちのお話を聞くだけということだったので、その知らない人たちの中で、私自身も知らない、単純に西洋美術史を勉強してきただけだったので、美術館を作るという仕事は初めてだったんです。なんとなくイメージとしては分かるんですけども、具体的に何をどうやって始めるのかというのは全く手探り状態。ですから、そこからスケジュールに沿ってですね、4年間のあいだ準備をしたということです。ちょっと話が長くならないように簡単にお話ししますが、非常に特異な時間でした。

ある意味では素晴らしい時間でしたが、今齋藤先生がおっしゃったように、ある意味では地獄の時間だった。4年間で、まっさらな状態からこういう美術館の建物と、それから皆さんが鑑賞する作品を揃えるというところまで全て整えておかなければならない。当時は若かったので、そんなもんかと思ってましたけれども、今考えるととてつもなくプレッシャーがかかる仕事だったと思いますね。

ですから、わずか8人か9人のスタッフで始まったんですけども、毎日その仕事は当然ですけども、しかし、少数精鋭の組織であってもお互いに忙しいので、コミュニケーションを図らなければということで、要するに飲み助の一番最高責任者の室長が呼びかけて、毎月一回、ご自分の自宅に全員集合で「ダルマ1ダース持ってこい」と。ダルマってわかりますか？ウイスキーのダルマのことですけども、あれを1ダース持ち込んで、とにかくみんなで、食事というよりも飲むことが食事みたいなものでしたけども、そこで集まって、いろいろな仕事の話も含めて楽しい時間を過ごした。ひと晩で1ダース全部開けました。それくらい何かこう、得体の知れない情熱というか、そういう熱にうなされたような、そういう状態であったと。

しかし、具体的なスケジュールというのはもう着々と決めていまして、美術館準備室が発足してから作品を収集する。それから美術館の建物を建設するための設計者は有名な大高正人さんという三春町出身で、戦後日本の建築を代表する建築家ですけども、大高さんという方に指名して設計していただくということが決まっていました。

一体、じゃあどういう美術館にするかということは、我々が一応、煮詰めて、設計者に渡さなきゃいけない。これは設計と条件と言うんですけれども、その条件というものを、例えばこの講堂は一体どういう部屋にするんだ、こういうオーディオとか座席は何人必要なのかとか、それからコンセントはどこにあるのかとか、そういうところまで含めて、美術館の諸室の設備まで考えていく。美術館全体を、エントランスホールから始まって展示室に入って、そしてトイレもあってレストランもあってという、そういう部分をどういう導線にしていくんだという、そういうところまでまさに設計の専門的な部分に触れるようなところまで我々の方である程度煮詰めなきゃならない。もちろん我々だけでできません。県には土木部があって、そこに営繕課という組織があって、図面を引く設計技師さんがいますよね。彼らにも特別支援で参加していただいて、一緒になって議論をしてということでやって、それでまあいろんな仕事がありました。

その中で一番美術館として大切なことは、コレクションをどういうコレクションにするかということです。この県立美術館の場合には、大きな3本の骨太の柱を建てた。一つはやはり福島県という固有の美術館です。福島県から輩出した素晴らしい画家、芸術家の素晴らしい作品を集めましょうということで、福島県ゆかりの作家作品。それからもう一つは、福島県だけで我々は成り立っているわけではなくて、日本全国の歴史というものを踏まえて、日本の近現代の素晴らしい作家の素晴らしい作品を集めたい。もう一つは日本を含めた全地球的ということですかね、世界的な視野で、特に日本の場合は近代美術の流れというのはヨーロッパ、欧米の美術の影響を大きく受けているので、そういったことも視野に入れてですね、海外の優れた作家作品と。そういう3つの方針の中でコレクションを肉付けしていく。

準備室が発足する1年前に県内の有識者、それから県外の美術館長クラスの専門家を招集してですね、美術館の基本構想というのを議論していく。その中で建設はどうするか、美術館の方向性をどうするかという議論の中に、こういう作品があったらいいね、ということです。こうしなさいではなくて。それを決めるのは県当局であり、県当局の中で美術館を作っていく我々学芸員とか、専門職であるということが暗黙の中に決まっていく。その議論の例えばの例として、ピカソがいいとか印象派がいいだろうとか、そういうふうなものが例示はされています。しかし、それを具体的に集めるには莫大なお金が必要になりますけれども、そのお金どうまく見合わせながら肉付けをしていくということがありました。

今回、この展覧会に合わせてのお話ですから、福島県の美術というのはどうしたらいいのか。それは要するに福島県という地域が誇るような、そういう作家作品というものを取り上げて、やはり福島県の美術館ということの一つの大きな特徴づけ、決してステイタスではなくて特徴づけをしていくということが始まりとしてありました。例えば日本の近代美術上の天才画家として知られている白河の関根正二の歩みとか、あるいはもう話は決まっちゃいましたが、国際的に知名度の高い有名な版画家斎藤清さんとか、そういった重点的な作家をまず着手してから、その間という失礼ですけども、その間にいろんなものを肉付けして行って、福島県ならではの美術の体系を目指すということをやっていききました。

最終的にはそういうことを目指して、今現在も方針が変わりではなく少しずつ、増淵さんを含めて学芸員の人たちの研究とか、そういう調査を含めて少しずつ進めておりますけれども、開館前後に、先ほど申し上げた今やっている「福島の実験家たち」という展覧会をね、やったわけで

す。

これはやはりどうしても、古い物故作家、歴史的な作家だけを扱っているだけでは、躍動感のある福島県の美術状況をお伝えすることはできない。これは美術館としてはやはり不十分であるということで、現存で活躍している地元出身あるいはゆかりのアーティストの作品を取り上げたい。そうすることによって県民の鑑賞者の皆さんにも、その作家の芸術性と言いますか、表現の深さみたいなものを知っていただく。後でも出てきますけども、県展という別の公募展は今でもあります。これは福島県の戦後の美術界の状況の中でも非常に重要な役割を果たしてきたわけですが、これは公募展です。公募展というのは制作の発表の場であると同時に、出品者たちの交流の場でもある。そして出品も1点、2点くらいのもので、作家の芸術性を深く知るといのはなかなか難しい。それをやるのは美術館しかやれないだろうというふうな自覚を持って取り組んだのが「福島的美術家たち」という展覧会なんですね。

そんなことで、建設の準備に関わるいろんな話はちょっと1日あっても足りないくらいの内容があるので、今日は少しにさせていただきたいと思います。

増淵：ありがとうございます。

酒井：アンドリュー・ワイエスとかについてもちょっと聞きたいと思います。

早川：ワイエスあるいは印象派も、福島県立美術館で多くのファンがいる作家ですね。まずアンドリュー・ワイエスという作家の作品をコレクションしたのは、これはまさに準備室発足の昭和55年。いきなり準備室発足の年にワイエスの代表作の《松ぼっくり男爵》、これを美術館のコレクションの目玉の一つとして購入しました。購入する前段には様々な議論がもちろんなされて、ワイエスという作家になぜ注目したのかというのは皆さん疑問に思われている方が多いと思います。

ワイエスはその頃は全国的に日本の美術愛好家には非常に知られていた作家です。つまり超人気の作家だったんです。我々普通の日本人にとって、海外、特に西洋、アメリカの美術の流れの中で、ワイエスという作家の名前はほとんど出てこない。しかし何でワイエスが日本人に急に知られるようになったのか。これは70年代のちょうど半ばぐらい、私がちょうど東京で学生時代だったんですけども、現存するアメリカを代表する国民的画家、写実主義の画家ということで、東京の国立近代美術館で初めて回顧展として紹介された。この時に上野の国立西洋美術館で同じ時期に確かゴッホの名作の展覧会がありました。だいたい我々美術界でどういう展覧会でどのくらい動員があったということは分かるんですけども、まずゴッホ、ダントツだろうと誰でも思うわけです。ところが蓋を開けてみると、同時開催の竹橋の近代美術館のアンドリュー・ワイエスがゴッホを遥かに抜いて数10万人のお客さんが来館したというんですね。ちょっと日本の美術館、美術界では考えられない、想像できないような結果が出てきたんです。ワイエスの非常に静かな、何でしょうか、単なるありふれた風景でありながら、非常に特別な何かメッセージなり、あるいは感情を伝えてくれる。ああいう画風が、美術に教養の無い人でも心を打つ。そういう力がワイエスの芸術にはあるということが、その時多くの人が感じて分かったんですね。

それ以来ワイエスというのは数年間、非常に日本の美術館の展覧会とか美術界に話題になって、

ワイエスの画風を追従するような画家も出てきたくらいです。そういう人たちがあって、福島県というのは、はっきり言うと都市型の文化というよりも田園型の、自然と共生で豊かな緑深い、そういうイメージがある。そういうイメージの福島県にふさわしい人のアートというような、そういう観点もありました。たまたまですけれども、それはマティスがいい、ピカソがいいという声もありましたけれども、何10億とするような作品を幾つも買えません。ワイエスは人気はありましたけれどもまだ、アメリカでは非常に高い評価で値段が高かったわけですが、フランス印象派とかピカソ、マティスに比べれば、まだ比較的入手しやすかった。で、ワイエスを中心に、アメリカという国の美術の流れの中に写実主義の系譜というものが、アメリカの歴史が始まって以来、伝統があります。風景画の伝統。そういうものにも目を向けるいいチャンスかもしれないということになって、具体的な戦略としてワイエスというのは、まだ日本の全国の公立美術館でも全く手をつけていない作家である。そういうことで、福島県立美術館にとっても素晴らしい展望が開けるだろうと。そんな議論の中で、ワイエスという画家に白羽の矢を立てたというわけです。

で、ワイエス1点というんじゃなくて、山梨のミレーもそうですけれども、1点豪華主義はやめようと。やはりワイエスの周辺、例えばベン・シャーン、私どもの美術館でも相当ベン・シャーンのコレクションが形成されています。そういうアメリカの日常的な情景の中で、親しみ深い美術の表現が生まれている。そういうところにこの美術館の特徴の一つというものを求めた方がいいのではないかと。そういうところから福島県立美術館のアメリカ美術のコレクション、ワイエスを中心にしたものが形成されてきた、ということになります。

増淵：ありがとうございます。早川さんにアメリカ美術を語っていただくと時間が足りませんね。

また次の機会にアメリカについてはお聞きするチャンスがあるかと思えます。

いま齋藤さんと早川さんに開館当初の濃密なオープンまでの時間についてお聞きして、いや本当にそれはすごかった、180時間の残業というのは本当に並大抵ではありません。お若かったですよね。齋藤さんが30代で早川さんが20代とお聞きしましたから、本当にフレッシュな情熱で取り組まれて、それが礎になって私たちに引き継がれているという。

早川：まだブラック企業という言葉が無かったからね。

増淵：無かったですね、はい。

収蔵品について、ワイエス、ベン・シャーンというようなアメリカ具象絵画を、まあ系統的というまでは収集できていませんけれども、収集している公立美術館は国内でもうちだけと思われまますし、それから先ほど齋藤さんのお話にあった横山操についても、戦後の日本画家としては本当に大変評価の高い作家で、その大作、代表作が当館に収蔵されているというのは、今も国内からの高い評価を得ているところです。その基礎を築いてくださったお話、大変貴重です。ありがとうございます。

そうした、横山操もそうですけれどもワイエス、ベン・シャーンもそうですが、うちの目玉作品、代表作というコレクションがごございます。そしてやはり県立美術館として、さっき早川さんが仰ったような福島の県作家についても系統的に収集していくというような方向性で今まで来ておりますが、実は美術館が開館する前から、福島県としては福島の作家の作品を収集し

ておりました。県の文化センターというのがございますけれども、これが1970年に既に美術館のオープン以前に開館しておりました。そこで、県展の時の作品で大変優秀なものでありますとか、それから県展の中から非常に優れたものを秀作選抜展という、そういう展覧会を実は昔、県ではやっていたんですね。福島県主催でやっております、その作品を買い上げたりしたものがございます。その文化センターの収蔵していたものの中から、それが当館の開館時に移管として、県作家のものがコレクションとして加わりまして、それがうちの柱の一つになっておりました。

そうした意味で福島の県展というのは、それまでも県内で美術の中心的な役割を担ってきたわけなんですけれども、これが昭和22年、戦後間もなく出来て、現在に至るまで皆さんのいろんな作品を発表する場となっているわけなんですけれども、今回の「福島の美術家たち2024」に出品している作家さんも、その多くが県展、福島県総合美術展に作品を出されている方たちです。なので県展というのは今回の展覧会にとって非常に重要な存在だと思うんですけれども、その県展についてどのような枠組みというか、どういう美術団体関わっているかとか、どういうメンバーがいらっちゃってどういうふうに生まれてきたのかとか、そのあたり、酒井先生、簡単にお話しただいていいでしょうか。

酒井：今年の県展は、78回展なんですね。間もなく出品者が出品して審査が始まって、また6月に県展がオープンします。78年前を考えると、文化センターができて県展が使われるようになって50年が過ぎたんです。その50年より前は、県展というのは各地区持ち回りで、体育館とか公民館とか、そういうところを県内5方部に分かれて巡回して審査をして、そこで展示しておりました。

その会場になった体育館とかなんかはその期間の間、移動パネルを立てて一般の人に鑑賞してもらっていたんです。20年ぐらい大変苦労した県展が開かれています。そのおかげで皆が苦労したのを今度は運動に換えて文化センターが陳情によって出来上がった。その10年後にこの県立美術館が出来たんですね。ですから、その力と言いますか、エネルギーはすごかったんだなと感じます。やはり苦労して県展を巡回展をやりながら、地区の人たちが苦労して県展を守ったんですね。そして不便だ不便だというところから文化センターがやっと建つようになって50年が経ちます。文化センターを作っている間に、今度はさらに運動を深めて美術館を作ろうという運動に先人たちが力を合わせて作ってくれた。その元になっている県展というのが、だんだんと今は分かり易く、皆さんでも公募ができるようになってきましたけれども、そこまでくるのに色んなことを先人が考えてくれたんだと思います。その審査をどうするかとか、それから募集する段階をどんなふうにするかとか、そういうことについては、大体県内と福島県出身者と二つのグループを一つにして県人というふうに考えて、今作られているように思います。審査員についても、できるだけいろんな分野の方に入ってもらって、どの作品に対してもある程度専門家が審査にあたるような具合にしようというのが現在のスタイルになっていますが、洋画の方で言えば、いろいろな表現のジャンルがあります。そのジャンルに合った審査員がほしい出てきてもらわないとうまくいかない。例えば抽象だけの審査員が偏っても駄目ですし、具象だけでも駄目なんですね。半抽象の人の作品もあります。そういう人たちにも対応できるような審査員の推薦制度を作り上げました。まず最初は、県内各地区から5方部に分かれて審

査員の推薦をしてもらって、その人たちのメンバーを見て、今度はジャンルごとにそのメンバーを分けて、その人たちの活躍を見ながら、今年度はこの方をお願いしようという会議を開けるようになりました。だいたい地区から審査員の推薦名簿があがるものが決定するまでだいたい3か月ぐらいかかって審査員を決めて、募集要項が今現在作られています。

それから、皆さんの出品の規定についてのいろいろ問題があるかと思いますが、今考えられているのは、以前の県展に戻そうということですね。あるいはこの内容をさらにもっとジャンルを広げよう、分野を増やそうと、そんなことも考えられているようですが、デザインがあったり、写真があったり、いろんな分野が入ってくると、県展はもっと総合的になって全国的になってくるのかなという考え方も要望の中にはあります。ところが今の文化センターではちょっとそれに応えるだけのパネルも面積もちょっと不足していて、要望に応えられないでいるのが現状なんですね。

今、増渕さんの方からありましたが、県展があつて、そこに招待者とか受賞者とか優秀作品がだいたい分かるようになってきました。で、その中から今度は、選抜した展覧会を開こうと。そして、その中から今度は福島県が「美術家たち」みたいなメンバーを選んでもらって展覧に供しましょうというアイデアが生まれてきています。

で、その元になっている県展が県民から支持されてここまでずっと繋がってきたというのが大変重要だと思っています。ですから、皆さん方が出品者とか一般の鑑賞者からいろいろなご意見とか何かを聞きながら、それを実行しながら、今現在に至ってるんじゃないかと思っています。そういう意味では、この今回の「美術家たち」展、そのずっと元を辿っていくと、県展がスタートになっている、大きな力を持っているんだなという感じでおります。

増渕：ありがとうございます。県展というのは本当に福島県の展覧会という意味なので、他の中央の公募展のような、主義主張が同じ、あるいは分野が同じ作家が集まるというようなものではないんですね。そういう意味で、すごく柔軟で大きな枠組みというのは本当に他にないものだなというふうに思います。

もともと戦後すぐに始まった県展は、県美協ですね、福島県美術協会というのは、昭和5年に石井柏亭なんかを審査員に迎えて本宮の伊藤さんという人がつくった、本当に古い戦前からの洋画団体なんですね。その洋画の伝統は非常に長く福島に受け継がれていて、学校の先生なんかを中心にずっと洋画が盛んになった。そしてもうひとつ、福陽美術会というのが大正8年にできるんですが、勝田蕉琴とか、中央で活躍している日本画家の、在京で活躍する日本画家の団体があつたんですね。その人たちも福島県内とは交流があつた。県内の作家さんと、東京で活躍する福島出身の作家さんというのが協力して、恐らく県展の最初期というのが立ち上がった、というふうに把握しております。

そういう伝統があつて、福島の作家さんってジャンルにとらわれずに郷党意識が強いというか、すごく繋がりが深いというか、そういう印象を持っておりますが、齋藤さんいかがでしょうか。在京美術家協会なんかも全然、会派関係ないですね。

齋藤：そうですね。いま増渕さんおっしゃったように、全国的にもちょっと珍しいような感じがするんですね。日本画の作家が集まって福陽美術会、現在の在京美術家協会というのがあります

が、この福陽美術会がもともとのきっかけかなと思うんですけども。在京美術家協会に、私もずっと現在も入っているんですけど、私県展の方の運営委員長とか、美術家連盟の会長も務めさせていただきましたので、できるだけ在京の作家との関係を持って県展の運営がスムーズにできればいいかなという、そういう思いで入ったんですが。

いろんな作家が集まって、ジャンルの違い、そして所属の違い、そういう作家が集まって結束してやる場所というの全国的にも珍しいらしいです。「福島県はすごいね」って、在京ではよその県の方たちからそういう話をよく聞きますという話なんですね。それが県展をうまく運営するのに非常に役立ってきたんじゃないかなと思うんですけど。美術家連盟そのものも、在京美術家協会も、もともとは昭和27年の12月に県がてこ入れして作った団体で、県展をスムーズに開催しようと、そこがあったと思うんですけど、美術家連盟ってもともと県の社会教育課の中に事務局があって、その職員も県職員が兼務していたんですよ。

今、私たち（県美術家連盟）のところちょっと降ろされて、補助金はほとんどカットされて自前でやっているような団体になっているんですけど、もともとは委託料であれこれお願いします県展お願いしますという感じだったと思うんですけど、現在は運営的に厳しいんですけども、皆さん一生懸命県展を少しでも良くしようという思いでやっております。

大山忠作先生も若い頃は県展の一般出品者だったんですね。室井東志生先生とか、それから小林五浪先生とか、中央で理事とか特待になった先生でも出発は県展だったので、県展は大きな最初の目標だったんじゃないかと思います。本当に大山先生が一般で出したっていうことはいろいろ見て調べて驚きましたね。それほど県展というのは皆さん大事に思っているのかなと思います。中央で会員で審査員やってても、県展に来ると審査される側になっている先生方も非常に多いんですね。他流試合ですから、厳しいと思うんです。そこでやっぱり上位に選ばれていうのは、自分たちにとって誇りだし、これを一つの目標にして、そこからまた上を目指していくという先生方が非常に多いと思うんですね。

早川：いま齋藤さんのお話を聞きながら感じたことですが、私たち普通のいわゆる美術愛好家とか一般鑑賞者から考えてみてもですね、福島県は地勢的にご存じのように浜通り・中通り・会津が柱になって、そして全体で7つの地域に分けられて、それだけ自然とかあるいは風土とか気候とか、そして人びとの気概みたいなもの、これがそれぞれ独特のものがあって、非常に多様な県土になっているというのが福島県です。そういった多様性をもった福島県から文化が育まれているってことを考えると、その反映である県展もね、ジャンルの多さもさることながら、やっぱり多様な地域の表情が県展にも集約されているんじゃないかというような感じも非常にしています。やはりこの福島県の県展の層の厚さというのは、全国にも県展って必ずって言うくらいあるんですけど、それと比べてみても出品者の層が厚い、同時に県作家の層も厚いって言うのは現状であることをぜひ皆さんも知っていただきたいと思います。

増淵：ありがとうございます。どうぞ。

酒井：県展のお話が盛り上がってきたので、もう少しだけちょっと一言お話ししておきたいと思います。洋画と日本画は現在応募規定で50号以下という規定で、大変制作者が多いせいか、制限を受けておりますけれども、このことについては、文化センターのいろいろな条件と期間の間

題で、最初は2期制であったのがだんだん1期に縮まったわけで、大変残念がる方がたくさんいらっしゃると思います。東北の6県を調べてみてもですね、やはり全国展に出す規格で受け付けているところはほとんど無くなってきたんですね。

それから、宮城県なんかは河北展がそれを代行していますが、はっきりした県展というのはいくらでもないわけです。山形なんかは、洋画の場合で言えば60号を最高にして公募しています。そんな状況で福島県も、もう少し大きいのにしたいと。あるいは、中央展にも繋がるような大きさに受け付けられたらどうかという声もあります。ところがまだそのことに関しては予算とか裏付けがないものだから、なかなか議論が深まらないんですね。大変そんなところに福島がいて、これからどんなふうに県展が変わっていくかっていう時に、やはり展示に関わる大きさというのも大変重要になってくるんじゃないかと思っています。皆さんも関心を持って、その辺を見て意見を述べていただければありがたいと思っています。

増淵：ありがとうございます。県展、それから県展は1970年から文化センターでやることになりましたが、84年に美術館ができました。やっぱり福島県ということ単位に美術の枠組みを考えると、県展という流れがあり、そして84年から美術館ができていう、2本のおそらく柱というか車の両輪のように動いてきたのかなというふうに思います。県展はあくまで作家さん主体に作家さんの中で審査をされて作家さんの発表の場として考える。そして美術館ができたときにですね、美術館はどういう役割を果たすか。美術館としては、学芸員の調査研究のもとに主催事業を行うというような、そういう整理の仕方を県ではいたしました。

なので、その中で美術館として、では作家さんをどういうふうに評価していくかというところを、いろいろな展覧会を今まで40年間しまして、取り上げさせていただいております。そのうち、先ほど早川さんからお話が出ました「福島の実験家たち」、これが1987年、開館まもない頃にやった展覧会です。やはり県展にたくさん出されている作家さんの中から選ばせていただいて、これが1、2、3まで続いています。そのへん美術館の県作家の紹介について早川さん、ひと言だけお願いします。

早川：あの、地域の中の美術館ということで、県の美術をどう扱うかっていうことに対してのいろんな私たちの検討の結果、「福島の実験家たち」の展覧会を企画する。その前に、開館の時にですね、開館記念展というのをいくつか構成でやったんです。東北を全体を対象にして、そしてその中から福島県を見てみよう。そういう展望をもって福島県というものを考えてみたいということで企画をさせていただいた展覧会が「現代東北美術の状況展」というのがあるんですね。これは東北6県で現存で第一線で活躍しているアーティストを取り上げて。古い日本画の伝統的な作風から超現代的なインスタレーションの作品まで、様々な形式の表現を取り入れてやった展覧会です。これはあまり、なんというんでしょうかね、地味だったかもしれないので、あまり多くの方が語ってくれないんですけども、企画した私としては、こういう経験によって福島県というものを相対的に福島県の美術というものを相対的に見る目ができるんじゃないかということ試みたことなので、その目線というのは今でも美術館の中に生きているというふうに思ってます。

で、「福島の実験家たち」展をずっとやってきて、少しずつ時代が変わってきます。そうすると、

例えば90年代に入ってくると、世界の情勢、あるいは日本の時代の趨勢というのがどんどん変化をしていくわけですね。コンピュータが生まれたりとか、そんなことで美術の表現というものが非常に伝統的な表現形式ではなくなっている。日本画ではない洋画でもない、でも新しいジャンルの表現が、インスタレーションだとかもそうですし、それ以外のいろいろなメディアによる表現というものが動いてきている。そういう新しい時代の流れの中で生まれてきた表現で、自分の芸術というものを目指していく、そういう流れができてきたのではないかな。そんな発想のもとにあって、次は「福島の新世代展」というのをやりました。これも必然的に世代が限られて、大体30代、40代ぐらいの年代のアーティスト。これはまあ、言ってみれば言葉で簡単に言うと新進気鋭という言葉に集約できますけれども、非常に実験的な作品を作り、そういう新しい試みをするアーティストを取り上げるという展覧会をやった。

でその後、現在始まっている「福島アートアニュアル」という、毎年これはやるんですね？大変ですね。やはりこれも作家を数名に絞って。まあ今回、今年の2月からやったのは、ほとんど二十歳前後ぐらいの作家が中心になっているので、このへんの世代だと私はちょっと皆目見当がつかないというか、あまりにも新しいので入っていけない部分がありますけれども、でも、そういう世代の表現にも目を向けていくことによって、昔から表現を大事にしてきている人たちにとってもいい意味での刺激になるであろうということはあると思います。

そんなことで、福島という縦軸を持ちながら、様々な世代とそれから表現というものを見ていく、そういうものを皆さんと一緒に鑑賞、共有していくということが非常に素晴らしいのではないかと。そんなことを美術館としては取り組んでいるということですね。

増淵：はい、ありがとうございます。おそらく県展が始まった頃、もしくは文化センターができた頃、美術館が開館した頃は、公募展というのが本当に美術のメインストリームだったわけなんですけれども、今のアートシーンを考えると、本当に多様な美術ができてきているということで、いろんな表現をすくい上げるというのがやはり美術館に課された使命なのかなと思っています。一方で今回その原点に立ち戻って「福島的美術家たち」をやったわけなんですけれども、やはりメインストリームかどうかはちょっと置いておいて、公募展というのはいまだに作家さんの重要な作品発表の場であり、そこから素晴らしい表現が出てきているというところをもう一度再認識しました。今回作品を展示させていただいて、本当に素晴らしい作品が多いなというのを改めて実感いたしました。そのへん、なんでしょう、美術館としてもいろんな美術をいろんな方向から取り上げていけるかなと思った次第です。

そうしましたら、もう少し時間がありますので、では今後に向けてですね、お1人ひと言ずついただけますでしょうか。では酒井先生からお願いします。

酒井：やはりここまでレベルの高い作品とかなんかが生まれて来ている背景を見ますと、やはり底辺がしっかりしてきたなとか、底辺が増えてこないとか、やはり上も油断してくるんだなという感じがしています。展覧会、特に県展にしろ美協展にしろそうですが、楽しんでやはり出してみようかなというスタートのところを大切に扱っていかないと、やはり育っていかないかなあと。あそこは厳しいからとかなんかではなくて、あそこは何か面白いことをやっているな、あるいは楽しそうだなというのも一つの要因になるのではないかなと思っています。です

から、皆さんに信頼されたり、あるいは仲間が増えたり、そういうことをしながら深まっていけば、ますます盛んになっていくのかなというふうに考えております。

特に若い人たちがですね、入りやすい、なんかやっぱり努力をしなきゃ、これからどうしても中年以上ぐらいの芸術になってはならないと思うんですね。もっと若い人から楽しんだり親しめるようなものにしていく努力をこれから重ねないと、若い人が増えないのではないかというふうに考えております。以上です。

増淵：ありがとうございます。では次、齋藤さんお願いいたします。

齋藤：そうですね、今、公募展のお話出まして、今いろんな様々な若い人たちがね、公募展離れがあるようにも感じるんですけど、ただ作品の評価というのがどこで評価されるのかというところで、やはり公募展は一つの役割を果たしていると思うんですね。私が若い頃はやっぱり無所属でいろんな展覧会でやってましたけど、社会教育課に文部省から派遣された土居正さんって方がいらしたんですけど、「齋藤さんは無所属で個展とかいろいろやっているけど、あなたの作品が良いか悪いか分かんないんじゃないか」って言われたことあるんですね。「公募展でやっぱり評価の定まった展覧会で出してみて、そこで入選するかそういうことがないとわからないよ」って言われたんですね。それも一つの、院展に出すきっかけになったのは確かなんです。そういう意味で、やっぱり県展というのは、重要な役割を果たしているんじゃないかと思います。以前の県展は、今はちょっと甘いという怒られますけども、入選率がかなり緩くなっています。以前は50パーセントぐらい、洋画に至っては30、40パーセントぐらいで非常に厳しかったんですね。作品も150号でしたから。で、県展っていうのは中央展と同じような感じで、すごい感動したの覚えてますけど、今は小さいので、それほどの感動が無いという怒られますけども、こちら（「福島の美術家たち 2024」）に出ているような大きさの作品がずらっと並んで。招待作家は中央展に出したのを持ってくるのですごい。こちらは刺激を受けることになりますね。そういう意味で、県展っていうものをもう一度見直して、将来の文化センターというものが新築されるという、まあ要望はしてますけど、そういう時期になった時にはですね、やはり県展を昔のような素晴らしい県展に戻して、若者がまたやってみたいと思わせるような県展になればいいのかなと思うんですが、ちょっと脱線したでしょうか。

増淵：いえいえ、ありがとうございます。では最後に早川さん、お願いいたします。

早川：あの、美術館とか県展とかっていうことからちょっと外れてですね、アートというのは人間が生きていく上での喜びであったり、もちろん悲しみも含めて、やっぱり人間の直接的な感情とか思想とかいろんなものを表現できる、そういう分野であり、それが自由に展開できるというのが理想だと思います。そういう環境づくりっていうんですかね、そういうものがあるということは素晴らしいことだと思うので、県展もその一つの形式だと思います。ですから、美術館も一つの制度の中で可能な限りそういう、表現することの喜びとか可能性とか、そういうものを感じさせる仕事、あるいは取り組みっていうのもね、これからは必要になってくると思います。そのそれぞれの立場でいろんな可能性にやっぱりチャレンジしてほしい。例えば、私は県展なんか随分と昔からお手伝いしたりなんざりして感じることもなんですが、ジャンルという

ものがちゃんと部門が決まっていますけども、そういう部門を超えて何か特別な新しいものを受け入れていくという、そういう発想を持った企画をですね、毎年同じ形式にこだわらないで、特別なコーナーを作ってそういうものを紹介するとかですね、そういう企画性を持たせた県展の新しいあり方ってのもあってもいいかななんて勝手に思ったりしてて、まあ実現できるかどうかはともかく、そういう発想を持つということが、より芸術、美術というものを人々の心に訴えていく、そういう結果になっていくのではないかな、そんなふうに思っています。

もちろん美術館もそういうことを目指して様々なチャレンジをしてほしいし、正直言うと、私としては後輩の人たちにも言っているんですが、独断と偏見でやれと。で、やるからには責任を持って、本当に心底そのやっていることに、心を入れてやってほしい。そうすると、それを見た人たちが自然に共感してくれる人も生まれてくるんじゃないか、そんなふうに思います。アートというのは、だから孤独な作業だし、孤独に楽しむこともできるわけですけども、みんなが共通の場で共鳴し合う、共感し合うということもすごく大切なことです。美術館でひとつの展覧会を見て、1人で見たいという人は1人で見るといいと思います。でも多くの人たちと一緒に見て、その場で同じ絵を別の人たちが、それぞれの思いで見るということが言葉にならない静かな共感というものを生み出すんです。こういう心理学の研究もあるくらいです。そうすることによって、芸術というものがその人にとって心に響くものを、何か生まれてくる、そういうこともあったりするわけなので、芸術、美術というのは奥深い世界だと思いますから、ぜひ諦めずに新しい見方にチャレンジしていきたいなというふうに思います。よろしく願います。

増淵：ありがとうございます。本当に美術というものの自体が、その時代時代に合わせて全然違う意味を持つようになっていく、この何十年かのことを振り返ってもそれがよく分かるかなと思います。今日のお三方のお話を伺って、この美術館にとっても、それからおそらく作り手の皆様にとってもですね、何かこう新しい方向へのヒントが今回のお話の中にいくつかあったんじゃないかなあとと思います。本日は本当に大変すばらしいお話をありがとうございました。